

「Cliché 序論」

富 永 道 夫

(I) Cliché の定義

cliché とは一言で言えば使い古した陳腐な表現の事である。即ちある言語に表われる特有な表現、あるいは極めて特殊な言い回しの持つ便宜性のため一時流行したものか、あるいは長期間にわたり余り頻ぱんに使用された結果、元来の表現上の効果を失い陳腐となり、これを無意識に使う時は聞く者をして嫌味と感じさせ、時には屈辱的ともとれるとされるような表現を言う。他に hackneyed phrases, trite (or stock) expressions, stereotyped phrases とも呼ばれる。cliché の語源はフランス語 clicher (=to stereotype) の H-form で cliquer(=to click) の変形であり、ステロ版印刷の事から型に入ったきまり文句、紋切り型の句を指すという説明が O. E. D. や Littré に見える。よく耳にする phrase から幾つかの例を挙げると、

- Ex. 1. to strike while the iron is hot (鉄は熱い内に打て)
- 2. by the sweat of one's brow (額に汗して)
- 3. truth is stranger than fiction (事実は小説より奇なり)
- 4. one's better half; my better half (妻)
- 5. the friend of man (犬)
- 6. bolt from the blue (青天の霹靂)
- 7. The travellers parted in Sydney; but *the world is a small place*, and they met next year in Paris (世間は狭いもので) etc.

従ってこれらの cliché は母国語であれば常に耳にし常識の一部をなす語学的背景となっているから、誰でも紋切り型として知っているという前提の上に陳腐なもの、あるいは時代遅れとか感ずるのであって、この前提を共通地盤として持たない外国人の立場から見た場合、cliché は極めて観念

的な把握に止まり文体を論じる上の盲点ともなっている。cliché の定義は実際上 idiom (慣用句) と極めて近い関係にあり、事実同じ表現が両者共通に解釈されている場合もある。例えば *in a nutshell* (=very briefly) は William Freeman の *A Concise Dic. of English Idiom* には idiom としてのっており C.O.D. に Can give it you *in a nutshell* の用例が見えるが Eric Partridge の *A Dic. of Clichés* には特に陳腐な表現の一つとして記録されている。このように、一つの表現法を批判しレッテルをはったりする場合に起る問題は、一様に解決され得ない。また jargon (意味のわからぬ語、または表現) とも見える unfamiliar clichés も、外国人としては黙過できないものである。このように cliché の定義は、一般的には陳腐な表現法と解されているが、ただ一元的に決められぬ多くの場合や背景をもつてゐる事が、強調されるべきであろう。

(2) レイベル (label) の問題点

cliché はもともとは、もちろん trite expression ではなかった。cliché という観念が盛んになって研究され始めたのは、主として今世紀になってからであろうと思われる。英文学にあっては、ミルトン、シェイクスピア、あるいはディケンズなどが、極めて創意溢れる colourful expressions をみ出した。シェイクスピアなどは、欽定訳聖書と共に、英語国民の中に最も根を深く下している英語表現法の背景であろう。彼の劇作に現われる analogy (類似法), rhetoric (修辞法) などは、今日いわゆる quotation clichés の主たるものとなっている。英語には、外国語に直訳しては極めて意味の取りにくい、独特の phrases が多い。これを普通 idiom と呼んでいるが、これらを含むばう大な熟語や collocation は、我々が英語辞書をひく時、数限りなく出合う事が出来る。しかるに普通辞引においては、これらの意味を解明するに精一杯で、精々古体であるとか明示するにすぎない。O.E.D. にあっても出典と年代を記すに止まっている。もちろんこれは純客觀性を期す辞書の立場からは、正しい態度といえるであろう。cliché を論ず

る事は、問題の性質上純粋な客觀性から逸脱するおそれがあるからである。しかし今日我々が、中学校から大学まであらゆる場所で、英語の表現法の一種として習っているものの内には、恐らく始めから cliché としての label をはって記憶した方が賢明なものもある。それならば、どうすればこれらが cliché であるか、あるいは usable idiom であるか判別するかが、極めて大切な、かつ困難な問題となる。英國の言語学者 Eric Partridge が、1940 年に上述の *A Dic. of Clichés* を出して、彼が陳腐な表現と信ずる語句や文例の大要を alphabetical に排列して出版した。Partridge は見方によれば、ややマニア的、あるいはアマチュア的な欠点もなくはなく、これらの cliché を選んだ範囲や、あるいは具体的基準という点については、この問題の性質上当然ではあるが触れられていず、これらはいずれも彼の過去読んだ、あるいは見聞した材料から採集されたものに過ぎず、決して総括的なものではない。アメリカの構造言語学派の大家 Charles. C. Fries 教授は、Partridge の言語研究に対する態度の科学性の欠如という点から、彼をそう高く評価していない。しかるに外国人の立場から見れば、時には一方的独斷的とも思える label も、一つの貴重な手掛りになり得るし、文体を論ずる上にも、あらゆる点で、極めて重要な研究資料を提供してくれたものとして、この業績は称えられてよいと思う。前に一度触れたように、Partridge が cliché と label をはったものの中には、別の語学書においてもこれを back up する意見と、またほとんど同じ文例が、good idiom として使われている例も多い。例えば B. T. Knight Smith の *Idiomatic English of the Present Day* において、序文に外国人としては、余程会話に上達するまでは使わない方が良いが、実際には教養ある英国人の口からよく耳にする idiomatic English of England を dialogue に含めたとある。これらの多くは、Partridge によれば cliché として扱われている。この点相矛盾するが、また言葉というものの性質上、かくあるべきという理論より、実際かくあるという facts の羅列も極めて大切である事を思えば、決して一方的に片方を是とする事も出来ない。例えば *to rain cats and dogs* (雨が土砂降りに降る) は、Partridge によれば十九世紀中葉頃から cliché となっ

たとされ、特に *hackneyed expressions* の一つに数えられている。(W. J. Ball もこれに近い意見を示している。Conversational English p. 52)。例を英文学作品中に求めると、

Ex. 1. "But it'll perhaps *rain cats and dogs* tomorrow, as it did yesterday, and then you can't go." — George Eliot (1819—80), *Silas Marner*, Chap. III

これによっても、当時会話によく使われていた事はわかるが、文章においては別の表現を用いている。また会話中においても同様である。

Ex. 2. "Why, it *rains heavy* still," he said returning from the door.
—ibid.

この *rain cats and dogs* は、また Smith の dialogue 中に idiomatic として現われている。

Ex. 3. Is this the way out? — No, the other way…… [It's] still *raining cats and dogs*. — B. T. Knight Smith, *Idiomatic English of the Present Day*.

この表現は O. E. D. によれば、1738 年に初めて現われたとされている。一般には、今日米国ではほとんど聞かれないそうであるが、英国では未だに時々耳にする事は、上例からも明らかである。また西印度諸島のような英語圏の中心を離れた方面の人々が、得意然と使っているのを耳にする。また *to thank from the bottom of one's heart* (心の底から礼を言う) も Partridge は cliché としているが、やはりハワイ二世からの手紙で見受けた事がある。更に *it goes without saying* (言うまでもない) は、Partridge によれば、フランス語の *Cela va sans dire* という諺の翻訳で 1890 年より cliché となったとあるが、同様に cliché についても多少言及している W. J. Ball の著書の文書中に使われている。

Ex. 4. *It goes without saying that* if the teacher wishes he can also use them to …… — W. J. Ball, Conversational English, p. 172.

もちろん cliché を絶対に使ってはならないという規定はないが、その他の用例においても partridge の意見と相矛盾する見方もかなり見られる。従

ってこれらの判定の基準については、ある程度個人的な感覚や教養その他の相違によるという他はない。特に保守性の強い人、あるいは古典への郷愁などが、古い紋切型の表現法を固守する傾向を生むともいえる。日本語においても戦時中によく言われた「打って一丸となる」、「生きとし生けるもの」、などは何か今日陳腐な感じを与えるし、また「同じ釜の飯を食った間柄」、「同じ穴のむじな」などの慣用的表現も、場合によっては idiom あるいは cliché と、とり得るであろう。従って本稿では、Partridge を決して至上唯一無二の範とせず、あくまで参考としながらも貴重な基準として、種々の文学作品などより採れる例文と対比して見たいと思う。Partridge の他には、アメリカの雑誌 *the New Yorker* の記者である Frank Sullivan が cliché expert として著名である。彼は意識的に cliché-ridden style の文を書き、これによって cliché の濫用を警告している。彼の他 Dudley Bateman, Alec King その他の諸家の研究意見を参考にし、作品を通して、英語における cliché を具体的に調べて見たいと思う。

(3) cliché の性質

cliché はもともと耳ざわりの良い、口づきまれ易い性質を持っていたのが、ある事態の表現として唯一無二のものである以外は、何度も使われる内に trite なものになったという性質を根本的に持っている。従って頻度が高いという点から見ても、先ず第一に、cliché は会話において使用される事が極めて多いという特徴があげられる。この理由として、先ず会話においては、表現法を考える時間に乏しく、すべて思いつきから突発的に口から出る場合が多いため、幼少より聞き古した慣用句が、思わず口について出るという事があげられる。次に音声を伴う時は、場合により、それほど嫌味に感じられない点、あるいはかえって効果を高める事も考えられる。

Ex. 1. "Did he drink?" — "Like a fish" — S. Maugham, *Before the Party*,
Casuarina Tree.

上例の *drink like a fish* は, Partridge により cliché と label されているが, W. J. Ball は *Conversational English* p. 53.において, 科学知識の発達は *drink like a fish* (魚が水を飲む—実際はそのように見える—ように酒を飲む) や, *as blind as a bat* (alliterative word-combination, 頭韻をふんで語調が良いが, こうもりは夜, 目が見える) のような, analogy は, すたれたものとなったと説明している。日本語でも「浴びるように酒を飲む」などの表現法があるが, *drink like a fish* は, 結局 battered simile あるいは simile cliché の一例となっている。しかるに上例の場合では, fiction の中の situation において, 特に音声や表情を伴って強意を表わす時は, 効果的に使われていると見る事も出来る。ここで cliché が小説の中に見出される場合, 作者自身が cliché のとりこになっているか, あるいは意識的に登上人物の会話の中に, cliché を使いわけ, その人物の地位, 教養, 年齢, 出身地その他に特徴を持たせているかの二つが考えられるが, やはり多くの場合は後者であろう。また文章の中に見出される時は, その本が書かれ出版された年代において, 已に cliché となっていたとは限らぬから, 恐らく一時的な vogue expressions (colloquialism) を用いて, 大衆的な効果をねらつたものとも見られる。これは Maugham の文体などにおいて顕著である。会話でも, 特に古典などの会話の中に見られる時は, ある時代にこのような表現法が極めて盛んであったという事がわかる。

次に cliché は, 教養あり文化の中心に関係を持つ人々の間におけるほど敏感に感じられ, 地方ではその感覚に遅れがあるため, cliché が idiom の地方化に先だって行く性質を持つものと考えられる。結局 cliché の地方化という事になるが, この現象は前出の *rain cats and dogs* などのように, 中心部で已に cliché と見なされ始めたものが, 地方では未だに idiom として通用しているような点に見られる。また新聞雑誌のように, 時間的性急を要する文の中には, いわゆる *journalese, commercialese* などと共に, cliché がそのまま使われたり, ある時は逆に効果的な使用により再び新鮮味が加えられる事もあり得る。George Arms 教授の研究にある cliché の修正表現がこれである。しかし作家や文筆業者に限らず, 一般的に文を

書く人々にも、従来の idiom を避け新しい simile (直喻) や metaphor (陰喻) の発明、漸新的な collocation, word-combination を確立する行き方が、従来のような既成 idiom をなるべく上手に用いて、英語らしく響かせようとする方法より、近來特に多く望まれている。然しこれらの device も、すべて English という大きな伝統的規約の中で行われなければならぬが、この伝統のわくの力が、将来の英語のあり方に大きく影響するであろう。

近來アメリカにおいて、英語国民以外からの移民の一世二世の著書が多く出版されている。自然社会科学の学術論文のような、非人称的なものはとにかく、人文科学的なものや文学となると、そこに表現上の variety を要求されるため、いきおい種々の style がとび出して来る。cliché (あるいは idiom) を無意識的に使い過ぎる傾向、更にもう一つは、各自の母語の背景から来る不自然な翻訳体である。この点について、Herbert Read は、英語国民以外の国より来た移民の英語が、正常な英語の idiom を破壊しているとなげいている。然るにこれが一面から見れば、極めて重要な意義をもつ事は、複合語である英語の過去の長い歴史を振り返る時明白である。また近來ソ連などにおいて、重要な学術書や文学などを英訳して、海外向けに出版しているが、このような所からも、英語に新しい idiom, vogue words そして cliché を加えて行く動機になるであろう。今日各国で英字新聞雑誌の発行が盛んで、英語が國際語となりつつある傾向が見える一方、こと更に英語的 idiomatic な表現にしようと意識的な文体を探る結果、cliché の多い文体になっていく場合も多い。これも cliché の地方化の一現象と見る事も出来る。

(4) cliché の分類

cliché を本質的な意味ではっきり分類する事はむつかしい。諸家の分類法も、いずれも便宜的であり、descriptive な統一法といえる。Partridge は cliché を分類して次の四つに大別している。

1. 今は陳腐となってしまった慣用表現 (idiom-cliché) この中に (二重句) — far and wide, heart and soul, etc. ; alliteration (頭韻) — with (all one's) might and main, slow but sure, etc. ; alternative (対比句) — kill or cure, one and all, etc. ; battered simile (使い古しの直喻) — as cool as a cucumber, as steady as a rock, etc. ; などが含まれて いる。
2. その他の陳腐な句 (non-idiomatic cliché) — at one's last gasp, the brave and the fair, etc. ; (これら二つで総計の五分の四を占めてい ると述べている。)
3. 外国語より来るきまり文句やおなじみの引用句 — aqua pura (羅), sans cérémonie (仏), sotto voce (伊), etc. この種のものは日本語に は極めて多いと思われる。
4. 英文学よりの引用文 (シェイクスピアや英訳聖書に特に多い) — A thing of beauty is a joy for ever (Keats), a dim religious light (Milton), etc.

また Dudley Bateman は Style in English Composition において、次の 四つに分けそれぞれ自家製の文例をそえている。

1. the Simile-cliché — simile (直喻) を用いた cliché で Partridge の battered simile に一致する。数が極めて多い。

Ex. 1. The injured man *lay like a log* on the ground.

2. This explorer is *as brave as a lion*.

3. Their car was *as old as the hills*. etc.

2. the Metaphor-cliché — metaphor (陰喻) を用いた cliché で, Partridge の idiomatic, non-idiomatic 両方にまたがっている。これらも多く改 良すべきものが多い。

Ex. 1. He was *quite a back number* after his defeat in the final.

2. The convict *had a golden opportunity to escape*. etc.

3. the Text-cliché — この種のものは、主として教訓書にあるような真 理、あるいは説教的なものでひんぱんに使われて cliché となつたもの

である。これは quotation cliché と一致しないが、極めて近い関係にあるといえる。

- Ex. 1. He died this evening ; it was very sad, but *of course no one can expect to live for ever.*
2. The explorers were glad to return ; *there's no place like home.*
 3. Of course, they may succeed ; *there's always hope.* etc.

また次の文例もこの Text-cliché の一種と見る事ができる。

4. He had been wild, thoughtless and selfish, but he had never before done anything dishonest, by which George meant illegal ; and if he were prosecuted he would assuredly be convicted. But *you cannot allow your only brother to go to gaol.* — S. Maugham, *The Ant and the Grasshopper.*
4. the Conversational-cliché.

これは主として会話などに非常にしばしば使われて stock expression になったもので、口調の良いものが多い。

- Ex. 1. *Slowly but surely, little by little,* the clouds covered the sun.
(alliterative doublet, 頭韻をふむ二重句)
2. He could not explain *the why and wherefore of his actions.*
(同上)
 3. *As a matter of fact,* it was a lovely day. etc.

以上便宜上から分けられたと思われる二つの分類法を見ても、絶対的なものではなく、cliché がこのようにはっきり分類され得るものでもないし、またこれらの範位から出たものも相当考えられる。従って本質的な分類ではないが、次のように分類する事も出来ると思う。

- (1) Aspects of English より来たもの—idiom (慣用句), colloquialism (俗語), slang (卑語), dialect (方言)—class dialect (階級などより来るもの), professional (炭鉱, すもうなど職業特有の表現より来るもの) を含む—provincialism (地方言), journalese (新聞語), commercialese (商業語), officialese (事務用語) などを含みあるいはこれらより転化

せるもの。

- (2) Rhetorical なもの——alliteration (頭韻), doublet (二重句), euphemism (婉曲話法), simile (直喻), metaphor (陰喻), rhyme (韻律), alternative (対比句),などを含む ornaments (修辞法) から cliché になったもの。
- (3) vogue expression——literary quotation (文学的引用文), proverb (諺) その他を含む表現より cliché となったもの。

以上の三点は, cliché を生ずるに極めて密接な関係を有している点, 今後時代の移り変りと共に数限りなく文例が現われ, 具体的に cliché の生成過程を明示する事であろうと思われる。本稿では以上の区別をいろいろかみ合せて文学上の実例を示し, その種類を明らかにして見たいと思う。

(5) Somerset Maugham の文体

文学作品の中に cliché を探す前に, Maugham の文体について一言ふれる必要があるよう思う。もちろんここでは, 全面的に彼の文体を論ずる事は出来ない。cliché という面から見た彼の文体的一面を見るにとどめる。近来 Maugham の研究は, 我国においても, やや過剰と思われる程盛んになっている。彼の文体を論ずる論文も出て来ている。しかし彼の colloquialism と cliché (現在から見て) については, 余りふれられていない。Partridge の cliché 辞典は 1940 年が初版であるから, Maugham が活躍し多くの作品を出したずっと後の事である。従って文学上からは, 十分モームの作品も対象の中に入っていたであろう。かように思われる程, Maugham の文章には, Partridge が今日 cliché と印をおした表現が多い。これ程 Partridge のいう cliché が多く見当る現代作家は他にいない。Maugham は晩年の著書 The Summing up (集計, しめくくりの意) の中で述べているように, Jonathan Swift (1667-1715) の散文を模倣する事から出発し, 英国博物館などで木や草の名前を憶えたりして英語の文章を身につける事を学んだ。彼がフランスで育ち英語がよく出来なかった為に, 意識的に, 当時英米人の間に口ずさまれていた colloquialism を丹念に研

究集して、作品に取り入れた事は十分うなづける。彼のよく用いる phrase の内 cliché とレッテルをはられたものは後に扱うとし、それ以外にも極めて特徴的な idiom で、他に余り多く例を見ないものもかなり見られる。これらは cliché として partridge の辞書にのせられていないものではあるが、今日では已に cliché に近くなっているのではないであろうかと思われる。幾つか例を挙げると、

Ex. 1. As it was, his heir was a nephew, not a bad boy, but not *a chip off the old block*. — The Colonel's Lady, The Creature of Circumstance.

[chip of old block=son resembling father (C. O. D.) 親によく似た子]

2. But it was tough on a fellow who wanted an heir *of his own loins*. — Ibid.

[one's loins=one's begotten offspring (C. O. D.) 自分自身の(血を引く)子]

3. There was nothing to it, he decided, and that silly fool of a critic had just been *pulling Daphne's leg*. — Ibid.

[pull one's leg=colloq. befool him (C. O. D.) 馬鹿にする、からかう]

4. "You know, we critics get *more kicks than halfpence*." — Ibid.
[more kicks than halfpence=more harshness than kindness (C. O. D.) 親切よりむごい仕打を受ける]

5. "I'll make up the bed *before you can say Jack Robinson*.
— French Joe, Cosmopolitans.

[before you could say Jack Robinson=very quickly or suddenly (C. O. D.) 大急ぎで、すぐさま]

6. He always *looked as if he had just stepped out of a bandbox*.
— The Ant and the Grasshopper, Cosmopolitans.

[look as if one came out of bandbox=of extreme neatness (C. O. D.) 非常にきちんとした、ぱりっとした]

7. "They all say that her *life hangs on a thread*." — Louise, Cosmopolitans.

[hang by a thread=(of person's life etc.) be in a precarious state

(C. O. D.) 要注意の]

8. And a year after Tom's death she allowed George Hobhouse to
lead her to the altar. —Ibid.

[lead to the altar=marry (C. O. D.) 結婚する]

9. No one surely could say that Elizabeth Vermont was *cast in the common mould.* —The Promise, Cosmopolitans.

[(fig.) cast in heroic etc. mould=of such character (C. O. D.) 平凡な性格の]

以上の例に見えるように、彼は多くの idiomatic phrases を文中に織り込む事により、英語らしく響く文体を苦心して作っている。彼の synonyms (同意語) の使い方も極めて特徴的で、あたかも synonym の辞典や Thesaurus を前に置きながら文を書いている印象を受ける。これは彼の Cakes and Ale* の原文を某英國婦人に、正しい英語の用法という点から大いに訂正させられたという彼の告白と共に、彼が眞に collocation や colloquialism に自信がなかったと解釈する事も出来る。東京教育大学、慶應大学などで教鞭をとられた英國人 R. A. Close 氏は、Maugham の文は三十年ほど前に流行した colloquialism** だらけであり（恐らく意識的に取り入れたものであろう）今日では全く時代遅れであり陳腐であると述べている。もちろん Maugham は彼一流の鋭い感、cleverness、広範位な読書や旅行などより来る数養と経験、これらの全能力をしづつて彼なりの不自然でない、しかも流行に従った文体を築き上げた。やはり Maugham と似たケースであるポーランド生まれの Joseph Conrad においては、この種の特徴は少ない。従って今日の見方では、特に Partridge の意見から見ると cliché となっている用例が、極めて多く Maugham の作品に見出されるのに不思議はない。Partridge の辞書は作家の文例を一々あげているわけではなく、概して phrase を羅列したものであるから、これら文学作品以外にもいろいろな situation にこれらの cliché が使われていたと想像できる。また Maugham の文には、Partridge の辞書に記載されてはいないが、idiom-cliché に準ずると思われ、今日一般的には他の表現を用いた方が良いと思われる

表現も相当ある事は前述の通りであるが、結局彼の文体は artificially simplified style であって、しかも過去の歴史的材料から適当に組合せて、rhetoric を築いた点などから見ても、今日より見てあるいは今後時代の移り変りと共に、彼の文中に cliché が多くなる事は当然と言えるであろう。

* Cakes and Ale は Maugham の 1930 年に発表した比較的後期に属する作品で、直訳は「お菓子とビール」で本邦において出版されている翻訳もこの題名であるが、本来の意味は cakes and ale=merry-making (C. O. D.) とあるように「歡樂、お祭り騒ぎ」の意である。Partridge は (good food) and drink, with a connotation of merrymaking と説明している。Shakespeare の Twelfth Night, II, Sc iii, に Dost thou think, because thou art virtuous, there shall be no more cakes and ale? というせりふがあり、大分人口に膾炙したものらしいが、Partridge によれば今日 cliché とらく印をおされている。また同様の例を挙げると、sound and fury がある。これも Partidger によれば cliché となっているが、William Faulkner に同じ名の小説がある。これも直訳は「響きと怒り」で、邦訳名もこの通りであるが、Partridge は sound and fury, (signifying nothing)=much furious talk, of no importance and little or no meaning と説明し、The New Century Dictionary は sound のみを mere noise, without meaning と説明し、共にマクベスの一節を用例として挙げている〔何れも (it is) a tale...以下を引用〕。

And then is heard no more: it is a tale

Told by an idiot, full of *sound and fury*,

Signifying nothing. — Shakespeare, Macbeth, Act V, Sc V.

従ってこの意味は「怒鳴り声、罵声」などの意で、しかも cliché と一方で label をはられる位英語国民の間によく親しまれた doublet を、フォークナーは敢て題名に選んだものと見える。現代小説において、この種のものは比較的多く他にも見出される。John Steinbeck の Of Mice and men, The Grapes of Wrath, Ernest Hemingway の For Whom the Bell Tolls なども、やはり相似たケースである。

** R. A. Close 氏は colloquialism と idiom の区別として、colloquialism

は一時的に流行する表現, idiom は何世代も過ぎてこれらが安定し恒久的となった表現という点で両者をはっきり区別し, colloquialism はなるべく使うのを避け idiom を大いに使うべしと説明しているが, この idiom と cliché の関係が前に述べたように個人差によるという印象を受ける。

(6) (文学作品に表わされた) cliché の実例

次に実際いろいろな文学作品に当って cliché とレッテルをはられたもの(*印), 現今では cliché に準ずると思われるもの, 場合によっては未だ有効と思われるものなどを拾い集め, 実例によって概観して見たいと思う。始めて idiomatic あるいは rhetorical なものから見ると, これらの中で最も多のが simile cliché あるいは battered simile と呼ばれるものである。simile (直喻) は普通描写の程度を単に強調する為に, 元来「いかにも…のように」とたとえる (allegory あるいは striking comparison) 等によって, 読者や聴者に生々と訴えかける修辞法である。従ってそこにはウィットあり, ユーモアありで, 文体の豊かさ個性の発揚を可能にする。しかるに次第に syntactic な一つの pattern が出来, alliteration, analogy その他の rhetorical な simile の型態が出来て濫用されるに及んで, 散文の中にその本来の目的とする力を弱める結果となった。W. McMordie 著の English Idioms (Oxford) pp. 87—90. にかけて, 多数のこれらの simile が idiom としてのせられている。二, 三の例を挙げると as black as coal (石炭のように黒い), as busy as a bee (蜂のように忙しい, 頭韻), as red as a rose (ばらのように赤い, 頭韻), as fat as a pig [butter] (豚[バター]見たいに肥えている) etc. ここに集められている simile は外国人(もともと印度人)英語学習者が暗記して使うように意図されたものであるが, cliché という立場から見るといずれも反論の対象となり得るものばかりであるといえる。例を文学作品に求めると,

Ex. 1. Romeo : I warrant thee, my man's *as true as steel.* —Shak.,
Romeo and Juliet, Act II Sc. IV. (はがねのよう)

2. *Swift as a shadow, short as any dream; Brief as the lightning in the collied night,* — Shak., A Midsummer Night's Dream, Act I, Sc. i. (影のように速く、夢のよう短く、稲妻のように短く、あるいは速く)

以上の例などはシェイクスピアの劇に源を発して英語の紋切型表現となつた典型である。

3. I prithee tell me ; Cram's with praise, and make's
As fat as tame things: on good deed dying tongueless
 —Shak., The Winter's Tale, Act I, Sc. ii.

Shakespeare はこの種の simile の本家見たいなものであるが、もちろん彼の時代には cliché ではなかった。cliché の評価はほとんどすべて今日の観念から見てである。彼は多くの舞台で上演した場合に聞映えのするような名せりふや表現を案出した。Shakespeare はその後長い間英語国民の間で、学校や放送その他の場所で教えられ、多く舞台で上演されると共に語りつがれて来た。これが誰もに共通する語学的地盤や背景の重要な一部をなすに至った事は疑い得ない。「真実」といえば、「はがねのように (as true as steel) という word-combination が多く人の頭にすぐ浮んで來るのであろう。これが時代と共に行きすぎて cliché と見なされるべき表現が多くなったが、現今でも未だにこれらの名文句は種々な場合に表われている。

4. "God help'em—it come to me *as clear as daylight;*" — George Eliot, Silas Marner, chap. XVI. (日光のようにはっきりと)
 5. "But what come to me *as clear as the daylight,* it was when..."
 —Ibid.

上例も 5. は the が入っているが、一般によく使われるきまり文句である。as clear as day が最も普通に聞かれる。その他 as clear as crystal [noonday, a bell (音について)] など。

6. " By God, as if I would rear such a monster! *As sure as I'm living,*
 I'll break the brat's neck." — Emily Brontë, Wuthering Heights.
 (きっと)

7. "Heathcliff did not glance my way, and I gazed up, and contemplated his features almost *as confidently as if they had been turned to stone.*" —Ibid.

以上の二つの simile の例は決して cliché ではない。むしろ当時已に多く存在していた筈のきまり文句を避けているように見える。しかし 6. の例などは、しばしば度が過ぎれば cliché となる可能性をもっている。

- *8. "I will be *as silent as the grave*, but honestly I don't understand who does it all mean?" — S. Maugham, The Wash Tub, Cosmopolians. (墓のように黙っている。口をつぐんでいわない)

これは Bateman によって cliché とされている。

9. She expected I'd *sleep like a top* and one thing she could say was the sheets were clean. — S. Maugham, French Joe, Cosmopolitans.

10. "Did you have a good night? I expect you slept pretty soundly."
— "Like a top." — Knight Smith, Idiomatic English of the Present Day.

上例は共に「回っているこまの様に見動きしないで」の意から「ぐっすり」の意。

11. "Did you sleep well last night? —I'll say, I *slept like a log*. (or slept soundly)" — Robert Russel. (丸太のように動かないで)

以上三つの例は cliché とは未だ断定されていない。これも今後の使用頻度によるであろう。

- *12. "Did he drink?" — "Like a fish." — S. Maugham, Before the party. (前出)

13. "*As sober as a judge*, and *as regular as clock-work* in his habits ..." — Wilkie Collins, The Dead Hand. (裁判官のように落ちつき、まじめで時計のように規則正しく)

共に紋切型の典型的なもので McMordie の idioms にも出ている。今日では共に cliché といって良いであろう。

14. "No, it was quite a good day for travelling; in fact, the sea was

as smooth as glass [as a millpond]. — Knight Smith, Idiomatic English (鏡のようにあるいは用水池のように静かにないでいる)

この内 *as glass* の方が一般的によく聞くきまり文句で、日本語の「油を流したような」に当る。cf. *as smooth as oil*.

15. Her skin was drab, her hair had lost its sheen and she was *as thin as rail*. — S. Maugham, The Colonel's Lady. (レール見たいに細い、やせている)

これも他に *as thin as rake [wafer]* (レーキ〔ウエハス〕みないに) というきまり文句がある。

16. "you've *as wet as a drownded rat.*" — George Eliot, Silas Marner. (溺れたねずみみたいにずぶぬれになる)

正しくは *as wet as a drowned rat*. これも慣用句で McMordie のリストにのっている。

17. The heavy shower had knocked flowers *as flat as a pancake*. — Dudley Bateman, Style in English Composition. (ホットケーキのようにぺちゃんこに)

これもよく聞く慣用句で、上述の Bateman によって cliché とされているものである。更に Alec King, Martin Ketly 共著の The Control of languageにおいて、この種の言い古された simile について修正表現として *as flat as a gramophone record* (レコードのように真平らに) の方がより示唆に富むものとして挙げている。その他にも *Go like an arrow* (矢のように早く行く) より *Step on it* (急げ), *as firm as a rock* (岩のようにしっかりした) よりも *as firm as reinforced concrete* (鉄筋コンクリートのようにしっかりした)の方がそれぞれ漸新かつ表現性に富むものとし、その他同様の例をいくつ挙げている。

18. ...and making subdued noises, very much *like a guinea-pig* that twitches its nose and... — George Eliot, Silas Marner. (テンジクネズミ、通称モルモット見たいな)

面白い表現であって現在の所、別に cliché とは関係ない。しかしこの種

の simile は常に他人と変っていて初めて面白いので模倣しないのが絶対に必要な条件となっている。

19. "Strain!" he snorted. "*Simple as A,B,C!* mathematical certainty!"

——Jack London, *The Sea-Wolf*. (A, B, Cみたいに簡単な)

A, B, C は alphabet の意であるが、これから転じて「初步」の意もある。慣用句は通例 as easy as ABC で McMordie の本にも出ている。

*20. "It's about the hottest stuff I ever read." he said. "*Selling like hot cakes.* And it's damned good." ——S. Maugham, *The Colonel's Lady*. (ホットケーキのように売れる)

この句は Partridge も Bateman もまたその他の諸家も cliché としている者が多い。partidge によればもともとはアメリカで起り十九世紀後半から二十世紀にかけ、英國では二十世紀に cliché となったとある。そして特に陳腐な表現の一つに数えている。

21. The great service to mankind of the advent of the atomic bomb has been to make as clear as crystal, the necessity to find a substitute for war in the handling of its international relations.

——USIS (水晶のように明白に)

この句は clear に関しては頭韻をふんでいて口調が良い点などから、最も一般的に広く使われている慣用句である。これは前述 Ex. 4 と 5 に扱ったが、今日では次第に cliché になりつつあると見る事が出来る。

22. "There's folks, i'my opinion, if they can't see ghos'es, no if they stood as plain as a pike-staff before em." ——George Eliot, *Silas Marner*. (錫杖のように一極めてはっきりと)

この句も頭韻をふんでいる慣用句で、McMordie の表にもえる。やはり 21. と同様の理由で、今日 battered simile の一つに数えられて良いと思われる。次にその他の rhetorical なものを挙げると、metaphorical なものでは前出の rain cats and dog が先ず挙げられる。これは Partridge は特に陳腐とし Bateman, Ball その他も cliché としているが Smith の dialogue に idiomatic として出ている事は前述の通りである。

- *23. "Of course it's only *a flash in the pan*, if you know what I mean." —S. Maugham, *The Colonel's Lady*.

flash in the pan=fail after showy start, like priming of old guns (C. O. D.), fig. a sudden showy or pretentious outburst or effort, without any result (The New Century Dic.) 日本語でいう線香花火のような、あるいは龍頭蛇尾の現象をさす metaphorical な慣用語で partridge は cliché としている。

- *24. Ghosts of the past thronged the silent patio and an age *dead and gone* gained a sort of shadowy life for me. —S. Maugham.
The Poet, Cosmopolitans.

上例は単に「死んだ、過ぎ去った」の意を口調上二重に形容詞を重ねた doublet で、Partridge により cliché とされている。Shakespeare に原型と思われる例がある。

25. He is *dead and gone*, lady,

He is *dead and gone*; —Hamlet, Act IV, Sc. iv.

- *26. "That's an awful *tit-for-tat*." —George Eliot, *Silas Marner*.

tit for tat=blow for blow, retaliation (C. O. D.) 「報復」やはり Partridge により今日では cliché になったとされている alliteration.

- *27. If he keeps his promise, my collection should grow *by leaps and bounds*. —A. Howes, M. Smythe, *Intensive English Conversation*, vol. II.

by leaps and bounds=with startlingly rapid progress (C. O. D.) 「驚くべき速さで」意味のよく似た語を音調上重ねた metaphorical doublet であり、Partridge は特に to go ahead by に続く時最も陳腐とし Bateman も cliché としている。同様の例を挙げると、

- *28. He says the working expenses went up *by leaps and bounds*.
—K. Smith, *Idiomatic English*.

- *29. "We're all good friends here, I hope. We must *give and take*."
—George Eliot, *Silas Marner*.

30. *Give and Take*: In economic terms, the results are impressive indeed. —Newsweek, April 25, 1960.

give and take=(to make) mutual concessions. 「譲り合い(う), やりとり, 交換」やはり Partridge は cliché としている。

- *31. It ended in the purchase of the horse by Bryce for a hundred and twenty, to be paid on the delivery of Wildfire, *safe and sound*, at the Batherley stables. —George Eliot, *Silas Marner*.

safe and sound は単に safe (安全な, 安全に) という所をよく似た意味の語と頭韻をかけて作った alliterative doublet で Partridge は特に陳腐としている cliché である。

- *32. "I've been at the christening of'em *again and again*, and took the water just as well." —G. Eliot, *Silas Marner*.

again and again は(何度も, しばしば, くり返して) の意で強調的な alliterative doublet であり, 他にも more and more, on and on など多くの相似た句があるが, Partridge によればこれも cliché となっている。恐らくの出典として Shakespeare の例を挙げている。

33. I have told thee often, and I re-tell thee *again and again*.
—Othello, Act I, Sc. iii.

- *34. As he opened it the rain beat in upon him, for it was falling *more and more* heavily. —G. Eliot, *Silas Marner*.

more and more=increasingly 「ますます」古くから用いられた alliterative doublet であるが, Partridge によれば十九世紀から今世紀にかけて cliché となったとされている。しかし今日までもよく耳にする句である。

35. I like Japan *more and more* as the days go by. —Barbara Brewster.

36. I looked at her *full and square*. —S. Maugham, Louise, Cosmopolitan.

full and square は「まじまじと」の意であるが, わざわざ doublet を用いたのは紋切型の句 fair and square=honest(ly), straightforward(ly) が頭

にあったからであろう。fair and square は韻 (rhyme) をふみ 1604 年より用いられていると O.E.D. にあり, Partridge は cliché としている。

- *37. Some who had stuck to her through thick and thin, refused to have anything more to do with her. —Ibid.

through thick and thin=under all conditions, resolutely (C.O.D.) 「いかなる時にも, あくまで」本々 thicket and thin wood (しげみやまばらな森) の意から来たと O.E.D. にあり alliterative alternative doublet である。Partridge は特に陳腐な表現の一つに数えているが, 特に to stick to a person に続く時はそうであると述べているが, 上例は丁度これに当てはまる。

- *38. Now and then he turned his head to look at her almost shyly.
—Edna Ferber, Saratoga Trunk.

now and then=occasionally 「時おり」直訳は「今と昔」で反対の意味を対比させた alternative である。現在でもしばしば見かける句であるが, Partridge によって cliché とされている。他に同様な例を挙げると,

39. He had to brace himself now and then with a stiff drink for his day's work. —S. Maugham. Louise, Cosmopolitans.
40. She went into the court-house now and then to hear him try cases.
—S. maugham, Before the party.
41. "..., if you could make up your mind to spend a twopence on the oven now and then—not every week, in course—I shouldn't like to..." —G. Eliot, Silas Marner.
42. It appeared that Don Calisto allowed the younger men of letters occasionally to visit him and now and then would talk to them with the fire that had electrified his hearers in the great days of his prime. —S. Maugham, The poet, Cosmopolitans.

最後の句については in the *prime of life* (人生の最盛期) なる表現法が cliché とされている。

- *43. sound (=make known, resound) his praises far and wide.

— C. O. D. (四方八方に)

上例は辞引の用例であるが、Partridge は十世紀からよく使われ始め十八世紀中葉から二十世紀にかけて cliché になったと述べている。

*44. "All that's neither here nor there," said Mr. Skinner.

— S. Maugham, Before the Party.

この句は Partridge の辞典では特にと記して it's…で始まっている。it's neither here nor there=it's of no consequence (そんなことどうでもよい)。十九世紀終り頃から cliché となった。

*45. "That sort of thing is bound to come out sooner or later."

— Ibid.

*46. I take in the [Evening] news too, but I think I shall drop one of them sooner or later. — K. Smith, Idiomatic English.

「遅かれ早かれ、早晚」よく聞かれる alternative であるが、やはり Partridge によって cliché とされている。

*47. There sleeps, year in and year out, while the people of Newport die off, one after another. — Bruce Graeme, Racing Yacht Mystery.

「年から年中、年中ずっと」cliché の一例として挙げられている。

*48. She said, 'All right—I'd like to,' and that was that. — A. Howes, M. Smythe, Intensive English Conversation, vol. I.

that was that=the matter was settled. 「それでお終い、それだけ」上例は会話によく使われる idiom としてのっているが、Bateman は the conversational-cliché の一つとしている。

*49. The rain poured down, and that was that. — Dudley Bateman.

*50. Last but not least: the engineering is of a high order. — J. A. Burtnieks, from 'The Guitar Review 20.'

last but not least=last in order of mention or occurrence but not of importance (C. O. D.) 「最後に言うが重要でないわけではない」この句は、Partridge によれば Spenser の 'though last, not least' (Colin Clout, 1595) を誤って引用した所から起ったのであろうと述べ、特に陳腐な句の一つに

数えている。次の例文はこれのやや変形したもので、このように引用違いというより、むしろ便宜上から時おり変形が起る方が多いのではないかと思われる。

51. *The most recent, but not the least effective addition to the larger guitar repertoire is the Concierto de Aranjuez by the blind Spanish composer Joaquin Rodrigo.* —from The Guitar Review 19.

上例で *recent* と *late* は同意語、その最大級は *last* であるから、ほとんど同じ意味であるが「最後」より「最近」に比重がかかっているので、巧みな変形といえる。次に主として non-idiomatic なものをその他の cliché の例として挙げると、

- *52. *That was all to the good.* —S. Maugham, The Colonel's Lady.

- *53. “*It'll be all to the good* if you can get it into that thick head of yours that there's a lot more in Evie than you ever had the gumption to see.” —Ibid.

it (or that) is (or was or will be) all to the good=It is, etc., ultimately an advantage. 「結局得策である、結構である」やはり Partridge によって十九世紀後半から cliché になったと label されている。

- *54. “He said he had *turned over a new leaf* now he was a married man.” —S. Maugham, Before the Party.

turn over leaf=mend one's ways (C. O. D.) 「やり方を変える、新奇一転の生活をする」この表現は本のページをめくる意から転化したもので、古くは 1597 年の記録が O. E. D. にある。Partridge はこれも特に陳腐な表現の一つと見なしている。これも maugham の好みそうな colloquialism の一つと思われるが、十九世紀に活躍した George Eliot の作品にも数多く見出される。

55. “Well, Master Marner, it's niver too late to *turn over a new leaf*, and if you've niver had no church, there's no telling the good it'll do you....” —G. Eliot, Silas Marner.

56. “Well, speak, then, and manage it, and see if you can't *turn over*

a new leaf..." —Ibid.

57. "But they must *turn over a new leaf* —they must." —Ibid.

58. But if Mr. Godfrey didn't *turn over a new leaf*, he might say
"Good-bye" to Miss Nancy Lammeter. —Ibid.

上例は何れも会話中に出で来るものであるが、最後の例は文章に出で来る点より見ても、cliché となる位ひんぱんに使われた表現である事が想像できる。

*59. She didn't care about hunting, and fishing bored her. Naturally
they'd *drifted apart*. —S. Maugham, *The Colonel's Lady*.

to drift apart=to become estranged in a passive, aimless, spineless way
(E. Partridge) 「自然と仲にみぞが出来る、仲が疎遠になる」やはり
Partridge によって二十世紀から cliché となつたとされている。

*60. George was *taken aback*. —Ibid.

taken aback=fig. surprised (C. O. D.) 「驚いた」この句は極めて多く
Maugham の文中に現われるが、partridge は 1880 年頃から cliché になつたと述べている。The Colonel's Lady の含まれている短篇小説集 *Creatures
of Circumstance* は 1947 年に刊行されているから、比較的最近で Maugham
の後期に属する作品である。従って Partridge の説に従えば、已に cliché
になつた表現を Maugham が使っていたわけで、もちろん個人の文体とい
うものは時代が変わつたからといって、年と共に大きく変化するものでは
ないが、Maugham の文体の後進性が見え始めていたと見る事も出来る。
また逆に Partridge の断定は最近における C. C. Fries のとった科学的踏査
の上に立つものかどうか、独断性が感じられるだけに疑問が残る。

*61.a foundation for any structure more substantial than a *Castle
in Spain* as a —S. Maugham, *A Writer's Notebook*.

この句はフランス語の châteaux en Espagne (castle in Spain) 及びイタ
リ一語の castelli in aria (castle in the air) から來たものとされ、「空中樓
閣を築く、空想する」の意でしばしば諺的に使われたらしいが、十九世紀
以降 cliché となつた。partridge は特に陳腐な表現の一つに数えている。

62. "I said I thought it was just as well *to be on the safe side.*"

— S. Maugham, Before the Party, The Casuarina Tree.

*63. Give government power to license or prohibit, and force became party to the struggle — force that might be exerted *on the side of Truth*, to be sure, but that might just easily sustain the opposite side. — U. S. I. S.

以上二つの例は cliché とレッテルをはられたものではない。partridge は to keep on the right side of law (法律を守る), to be on the side of the angels 精神的な物の見方をする) の二つを cliché として挙げているが、上例は文型としては極めてこれらの相似たるものである。このような文型は恐らくよく使われる型なのであろう。

*64. The novelist or the musician has to learn his job just as the engineer or stockbroker has to learn his, and he too has *to make both ends meet* and need to be paid or otherwise supported.

— E. M. Forster, The Duty of Society to the Artist.

make both ends meet = live within one's income (C. O. D.) 「収入内で生活する」。<Fr. joindre les deux bouts (O. E. D.)> Partridge は to make ends meet の句を挙げ十九世紀から cliché になったとし特に陳腐な表現の一つとしている。

65. He was *every inch* a poet. — S. Maugham, The Poet, Cosmopolitans.

every inch は in every respect 「どこから見ても、すみからすみまで」の意であるが、Partridge は every inch a king を cliché として示している。これはもともと Shakespeare の引用である。従ってやはり紋切句であろう。

66. I, *every inch* a king. — King Lear, Act IV, sc. vi.

*67. Louisa Anido as a guitarist is *second to none*. — B. A. Perrott.
second to none (誰にもひけをとらぬ、負けない) はよく聞く句であるが、Partridge は 1860 年頃より cliché となつたとのべ、Shakespeare の A Co-

medy of Errors, Act V, sc. i. に使われていると説明している。cf. *Second to none* that lives here in the city: —Shak.

- *68. Among these I learnt was 'The Ant and The Grasshopper' which is devised to *bring home* to the young the useful lesson that.....
—S. Maugham, *The Ant and The Grasshopper*.

bring home to=convict or convince of (C. O. D.) 「納得させる」この句について Partridge は incipient (初期の, 余りひどくない) cliché であるとしている。

- *69. "I shall pay for it to-morrow," she said to me in her plaintive way "*I shall be at death's door.*" —S. Maugham, *Louise*.

- *70. If she was called upon to do anything tiresome or inconvenient her heart went back on her and there she *was at death's door*.
—Ibid.

be at death's door (死にひんする, 死にそうになる) は頭韻をふむ rhetorical は表現で, Partridge によれば十六世紀及びそれ以後よく使われ十九世以後 cliché になったと述べ *to lie at death's door*, *to bring to death's door*. なる句も挙げている。

- *71. She didn't mind it if a man *laid down the law*. —S. Maugham,
Before the Party.

lay down law=talk authoritatively, hector (C. O. D.) 「威張る」1880年代に cliché になったと Partridge は述べている。

- *72. He seemed to *be at a loose end*. —Ibid.
at a loose end=without definite occupation (C. O. D.) 「ちゃんとした職業がない, ぶらぶらしている」十九世紀より cliché 化。

73. "He's *head over ears in love* with her" —S. Maugham, *Louise*.
74. The father idolised his trim, smart, handsome boy and was horrified when he fell in love with a Burmese girl, but not just in love, *head over ears in love*. —S. Maugham, *A Writer's Notebook*.

head over ears in love は普通に使われる *over head and ears in love* (首

ったけ、すっかり夢中の) の変形であるが、後者の方について、十八世紀終り頃から cliché になったと Partridge は述べている。Ex. 73. 74. の例もこれに準じて差しつかえないと思われる。

75. *By the same token* I bought that day a paper-weight, which cost me a whole shilling — an extravagance which made me tremble.
—George Gissing, *The Private parer of Henry Rycroft.*

by the same token=arch. or joc. in corroboration of what I say (C. O. D.); moreover (C. O. D.) 「その上、加うるに」 Partridge は Shakespeare も 1606 年にこの句を使っているが、十八世紀後半まで cliché ではなかったと述べているが、現在では特に陳腐な句の一つに数えている。C. O. D. によれば古体あるいは冗談的な用法と説明されている。

76. "At all events you have had a fine life," I said. —S. Maugham, *French Joe.*

at all events=in any case (C. O. D.) 「どちらにしても、結局は」この句は cliché ではないが、idiom と cliché の間位に来ている句ではないかと思われる。

77. But when circumstances forced George to realize that his brother would never settle down and he *washed his hands off him*, Tom, without a qualm, began to blackmail him. —S. Maugham, *The Ant and the Grasshopper.*

wash one's hands=fig. decline responsibility usu. of (C. O. D.) 「と手を切る、から手を洗う、引く」 Partridge によれば、もともと聖書のマタイ伝で、総督ピラトがイエスの無罪を主張した後、手を洗う話から来たとなっており、十八世紀以降 cliché となったと述べている。

- *78. Her name *stank in the nostrils* of decent people. —S. Maugham, *The Promise.*

stink in one's nostrils=be offensive to him (C. O. D.) 「不愉快な、鼻持ちならぬ」 Partridge は *stink in the nostrils of* は 1910 年頃より cliché となつたと説明している。因みに *Cosmopolitans* が発行されたのは 1936 年

である。

- *79. *Forlorn Hope*. — Napoleon's Letters, Translated by J. M. Jhompson.

forlorn hope=storming-party; desperate enterprise (C. O. D.) 「決死隊、捨てばちな行動、かすかな望み」やはり Partridge によって十九世紀中葉から cliché となったとある。

- *80 "Her husband appears to be a very *rough diamond*" — S. Maugham, The Wash Tub.

rough diamond=not yet cut, person of intrinsic worth but rough manners (C. O. D.) 「すぐれているが荒けずりの男」Partridge は Dryden が洗練された Chaucer を評して rough diamond と呼んだ逸話を挙げているが、この句も特に陳腐な表現の一つとしている。

- *81. "A queer fish he was and no mistake." — S. Maugham, French Joe.

- *82. Captain Bartlett certainly was a queer fish, but he is of no moment to my present purpose, — Ibid.

a queer fish=(colloquial) A strange, odd, or mysterious fellow (E. Partridge) 「奇妙な、変な、おかしな奴」C. O. D. は fish=(colloq.) person of specified kind と説明し queer fish の他 cool fish, loose fish (冷い奴、だらしない奴) を挙げているが、Partridge は queer fish のみに言及して十九世紀から cliché となったと述べている。次に主として literary あるいは quotation-cliché に属すると思われる例をいくつか挙げて見る。

- *83. However, *be all this as it might*, Johnson is now minded to wed; and..... — Thomas Carlyle, Boswell's Life of Johnson.

上例とやや似た型で be that as it may=nevertheless「それでもかかわらず、どうあろうとも」を Partridge は特に陳腐な句の一つに数えている。彼は 1937 年の文例 (Michael Innes) を挙げ 1880 年頃から cliché になつたとしている。Carlyle (1795—1834) の活躍した頃はもちろん cliché ではなかった。現代作家からの文例として次の文が挙げられる。

- *84. *Be this as it may*, the fact remains that the inmates of the Grand Hotel were for the most part women, and very gay it was in the patis at luncheon and..... —S. Maugham, *The Closed Shop, Cosmopolitans.*
85. To be, or not to be ; that is the question ; —Shak., *Hamlet*, Act II, Sc. ii.

「生き永らえようか死のうか、それが問題だ」 シェクスピアの名句中最も人口に膾炙せるもので quotation-cliché の典型である。一般に英文学といえばシェクスピア、シェクスピアといえばハムレット、ハムレットといえばこの to be or not to be... と結びつく位に有名になったので、Partridge のいう如くしばしばもじって (parody に) 使われたりする。これは尾崎紅葉の金色夜叉の中のせりふ (熱海の場面) とやや似ている向きがある。この句は買物に行っても「買おうか買うまいかそれが問題だ」とか「行こうか行くまいか...」のように冗談まじりに使われる可能性もある。Partridge は十九世紀より cliché になったと述べている。

- *86. There are more things in heaven and earth, Horatio, than are dreamt of in your philosophy. —Ibid. Act I, Sc. v.

上例の文は唯「宇宙は神秘である」の意をかく表現したもので、十九世紀より cliché になったと Partridge は述べている。

- *87. Macbeth: Canst thou not minister to a mind diseased, Pluck from..... —Shak., *Macbeth*, Act V, Sc. i.

to minister to a mind diseased=to heal to do something towards healing—mental derangement. (E. Partridge) 「精神攪乱をいやす」頭韻をふむ English quotation-cliché で Partridge は十九世紀より cliché としている。

- *88. Montague hath breath's his last. —Shak., *Henry IV*, 3, Act V, Sc. ii.

to breathe one's last=to die (死ぬ、最後の息を引きとる) やはり十九世紀この方 cliché になったと説明されている。C. O. D. には breathe one's last breath or last=die と記されており、Cognate object と頭韻をふむ型

の変形であるが、これについて Partridge は言及していない。

89. *All's Well that Ends Well.* —Shakespeare.

「末よければすべて良し」という Comedy の題名であるが、やや諺めいて來たので、cliché になる可能性も十分あると思われる。現在ではしかし cliché として扱われてはいない。

90. *Fourscore and seven years ago* our father brought forth on this continent a new nation, —A Lincoln, the Gettysburg Address.

これも名文として極めて著名であり決して cliché というものではないが、parody にされる恐れもある。しかし聖文化されているのでこの型が濫用されるのを防いでいるといえる。

91. “Fancy Evie breaking out into poetry. *Wonders will never cease*”
—S. Maugham, *The Colonel's Lady*.

Wonders will never cease は「不思議な事は絶えないものだ」の意であるが、この will と同じ用法の極めて近い慣用句 *Accidents will happen* 「事故はあるもの」をもじったように見える。*Accidents will (or do) happen* は Partridge により十九世紀から cliché となつた表現とされている。

92. *There's no accounting for tastes!* —K. Smith, *Idiomatic English*.

93. *There's no accounting for tastes, you know.* —George Du Maurier, *Trilby*.

上例はいずれも「たで食う虫も好きずき」の意の諺で、上例のように会話にしばしば出て来るもので、特に cliché と label をはられてはいない。しかしその可能性のある事は同意の句 *tastes differ* 「趣味は人によって異なる」という諺が Bateman によって the Text-cliché の一つとされている事から見てもある程度考えられる。

*94. She didn't like tennis as much as her sister did; but then, we all know that *tastes differ*. —D. Bateman, *Style in English Composition*.

*95. “*It's no good crying over spilt milk* and it would only make

things worse if I made a fuss." —S. Maugham, The Colonel's Lady.

「覆水盆に帰らず」と同意の諺であるが Partridge によれば to cry over spilt milk=to give way to vain regret 「無駄に悔恨にふける」は 1880 年頃から cliché になったと説明している。この諺は最も一般的には It is no use crying over spilt milk となっているが、Partridge は cry 以下をとって cliché としている。諺に精通し、会話に時おり用いる事はいろいろな意味で表現を豊かにするものであるが、諺のリストを見てどれが cliché になりどれだけが使っておかしくないか判断する事は極めてむつかしい事であるし、実際上客観的にレッテルをはる事すら至難である。ただ一つの道はこれらの紋切型の表現法になるべく精通し、あらゆる場合に使われるのを聞きあるいは実際に使って、その効果の可否を（ある程度主観的であっても）決定する他はない。

(7) 残された問題

以上 cliché とされているものあるいは準 cliché と見なされ得る文例を作品の中より選び出し、cliché の具体的実例の外かくを見たのであるが、これらとしても未だ cliché がこのように実際の文学中に散見するとか、あるいは現在 cliché とはなっていてもある時代に流行したもたであるという風に判断し、これを知識として身につけるべきごく一部を提示したに過ぎない。cliché とは何かについての具体的把握は実際未解決のままである。最近英米でも cliché の研究家がいろいろ意識的に cliché-ridden style のひな型を示してくれるが、これらがいわゆる典型的紋切型の句ではない場合、即ち受け入れる側から見てある表現に対する知識が微弱である場合、ある評価なり具体的実例を事実として受け入れる事は出来てもその後が続かない。これ以後の判断の基準をつかむ事の何とむつかしい事であろうか。外国語として英語を学ぶ時、口語文語などの style 判別のきっかけを知る事が学習上最大の盲点とされているが、この文体の一部をなしこの上

に大きな力を持つ cliché の研究もまた外国人学習者の盲点である。最近は新鮮ないい回しを文筆家が発案する傾向と共に従来からある cliché の修正表現や婉曲表現が witty な表現力を与える点などに関する研究が George Arms 教授によってなされている。しかしながら同教授の掲げる文例の効果を理解する事は極めて困難を伴う。Partridge の cliché 辞典は cliché の研究に先鞭をつけ、cliché の意識のない人々にも認識を与える点、啓蒙的にも大いに貴重であり、本稿においても一応これを判断の基準としてその是非を調べた。しかるにこれはあくまで今後の困難な研究への足がかりであり、残された問題への端緒を開いたに過ぎぬ。従って今後もこの残された難問に対して、より広範囲な資料を求め、共に研究し続け度いと感じている。

参考書目

1. Eric Partridge : A Dictionary of Clichés, 4 th Edi., Routledge & Kegan Paul, London.
2. Dudley Bateman : style in English Composition, 1939, Macmillan, London.
3. Alec King, Martin Ketley : The Control of Language, 1957, Longmans, London.
4. James McPeek, Austin Wright : Handbook of English, 1956, The Ronald Press Company, New York.
5. Edwin Woolley, Franklin Scott, Frederick Bracher : College Handbook of Composition, sixth edition, Heath and Company, Boston.
6. W. J. Ball : Conversational English, 1954, Longmans, London.
7. W. McMordie (R. C. Goffin) : English Idioms and How to use them, 1954, Oxford.
8. G. H. Thornton (Kathleen Baron) : Teach Yourself Good English, 1951, E. U. P., London.
9. G. H. Vallins : Good English, How to Write it, 1951, Pan Books, London.
10. Eric Partridge : The Concise usage & Abusage, 1955, Hamilton, London.
11. " " : English, fourth edition, McDonald, London.
12. Alderton Pink : A Dictionary of Correct English, 1948, Pitman, London.

don.

13. The Concise Oxford Dictionary (C. O. D.), Fourth Edition, Oxford.
14. Oxford English Dictionary (O. E. D.)
15. Thorndike-Barnhart Comprehensive Desk Dic. 1956, New York (C.D.D.)
16. The New Century Dic. 1953, New York.